私たちと戦争

青山中学校　３年　奥川　來夢

私たちは普通に道を歩き、夜安心して寝ることができ、朝起きてからやることがある。そして将来の夢を持つことができる。これが当たり前のように生活してきた私たちは「戦争」ということに無関心過ぎたと思います。今回広島平和ツアーに参加した私が感じことを紹介します。

まず１番に戦争は二度と起こしてはいけないということです。すごく有名な言葉ですが本当にこの言葉が１番だと思います。戦時下では、道を歩いていると地雷を踏んで足が吹っ飛ぶかもしれない、昼夜関係なくいつ敵が攻めてくるかわからない、食料は買うのではなく配給制。いつ死んでしまうかわからない状態で毎日生活していました。そのため将来の夢を持つこと、やりたいことがやれないことを知りました。私は将来の夢があるのってすごく幸せなんだなと思いました。幼い頃将来何になりたい？とよく質問されたのを思い出しました。誰かを助けるプリキュアになりたい、芸能人の人に会ってみたという夢を持っていました。もしも日本が、今も戦争している国だったら子どもたちは夢どころではない。生き抜くのに必死で、将来の夢なんて考える暇さえもない。今の私たちに夢があるとかないとかと言えるのは、本当は幸せなことなんだと実感しました。

平和記念館では、「衣服は引き裂け、皮膚は垂れ下がる」「垂れ下がった目玉を手で受け止める」「皮膚が焼け落ちた学生たち」「目の治療中の負傷者」当時の人々の叫びを表現した絵や写真が展示されていました。それを見た時ひとつの原子爆弾、「リトルボーイ」によりたくさんの尊い命が奪われ一瞬で待ちが焼き尽くされ、生き地獄となってしまったことが本当に恐ろしいと感じました。放射線の影響を受け細胞が破壊されてしまったり突然発病してしまい亡くなってしまったり終戦後も苦しむ人が多かったことに心が痛みました。

私がタイムスリップして戦時中に行き、戦車のシートや軍服を作っていることを想像すると当時の学生は今の私たちのような自由がなかった、それが当たり前だと思って生活していたんだと思いました。同じ人間として生まれてきたのにちょっと生まれた時代がズレていただけでどうしてこんなにも「当たり前」が違うのだろう、どうして争いという手段しか選ばなかったのだろうとたくさん疑問が頭をよぎりました。そして、私は戦争に出撃し若くして亡くなってしまった人、悲しい亡くなり方をしてしまった人たちが出来なかった勉強ややりたかったことを今、この世界で生きている私たちがたくさんやる事が天国にいる皆さんへの恩返しになると思いました。また今に繋げてもらったことをさらに未来に繋げることが恩送りになると思いました。

そのために私がしたいことは戦争の恐ろしさや悲しみをたくさんの人に広めることです。先日テレビで戦争を経験した方のお話を聴きました。共有してみなさんおっしゃっていたことは「思い出したくない」ということでした。そんな中でも当時のことを話してくれたみなさんは本当に素敵でいつの間にか涙が出ていました。その中の１人の方が話していたことを紹介します。

当時小学校高学年、年下の低学年の子の声が枯れ、今にも亡くなってしまいそうな声で「ミズ」と言いました。先生に「あげたら死んでしまうからあげるな」と言われても自分より幼い子がそんな顔で言っていたのであげてしまいました。そうするとその子は喜んで水を飲みそのまま体が麻痺し亡くなりました。そのあと学校でその子の遺体を燃やしました。目の前で人が燃えているのを見て本当にしんどかったとおっしゃっていました。水さえ自由に飲むことができず亡くなる。二度と、絶対にあってはならない事だと感じそれを見守っていた方々も本当に辛かっただろうと思いました。

私は目の前で誰かが亡くなってしまったという経験はありません。そのことが当たり前ではないからです。今私たちが生きているこの世界は誰かが繋げてくれたからあるもので当たり前なんかじゃないということを学びました。そして身近な人にたくさん感謝の気持ちを伝えていきます。